

重要文化的景観 —重要な構成要素の紹介8—

沙流川流域の産業景観(沙流川区域:自然とアイヌの伝統、開拓の営為が織り成す多文化な河川景観)

沙流頭首工さるとうしゅこうは沙流川中～下流域における農業用水の供給施設です。近代以降、沙流川下流域で米づくりが盛んになっていき、かんがい用水をしっかりと整備する機運が高まってきました。沙流頭首工はそうした地域の大きな要請に応える形で1915(大正4)年に作られました。沙流川流域の水田耕作は、1876(明治9)年にエシヨロカン沢(現日高町平賀)で稲作が成功したことに端を発します。造田熱ぞうでんねつは1913(大正2)年の土功組合どこうの設立に繋がり、1916(大正5)年にはかんがい溝(水路)を用いた水田が飛躍的に発展します。沙流頭首工からのかんがい溝は15kmあり途中の小沢から流入する水も計算され、河口に行くと幅が狭くなります。水の管理は4月下旬から10月の稲に実が入るまで必要で、天候次第で水量を調整します。1970(昭和45)年になると米の過剰生産による生産調整が行なわれ、トマト栽培が開始されるようになります。

1997(平成9)年には二風谷ダムから頭首工まで導水管が敷設され、新たな通水が始まりました。地域の低平地には自然流下方式の頭首工と、電力ようすいと揚水機しゅすいの取水施設10カ所があり、各取水施設まつの近くには水神が祀られ、例年通水時に安全と豊作が祈願されています。(長田佳宏)



沙流頭首工(北西から)。二風谷ダムの完成に伴いその役割を終え、現在は頭首工のみが保存されている。



視点場からは沙流頭首工と合わせ、チブサンケの舟着場やアイヌ伝承地のペンケ・パンケトコムなど、多様な景観を眺望できる。



かんがい溝と水田、トマト栽培のビニールハウス(平取町本町:西から)。 ※この場所は重要文化的景観ではありません。